エラスムス『平和の訴え』と 1517 年 2 月 21 日付フランソワ 1 世宛書簡

海　津　　淳

キーワード：エラスムス『平和の訴え』、エラスムス書簡、イタリア戦争、フランソワ 1 世、ブルゴーニュ公シャルル

序

16 世紀―後期ルネサンスを代表する人文主義者デジデリウス・エラスムス Desiderius Erasmus（1466/1469-1536）の著作の主題（領域）は、ギリシア・ローマ格言や哲学者に関する古典古代、古代教父研究、新約聖書の校訂から 16 世紀当時の神学者との論争、同時代の様々な問題に関する提言・批判から教育論まで、「知識人の王」の名に相応しく極めて多岐に亘っている。そうした中で「平和」は、彼の生涯を貫く重要な主題のひとつである。『平和の訴え』Querela Pacis（1517、フローベン書店、初版？）、『戦争は体験しない者にこそ快し』Dulce Bellum Inexpertis（『格言集』Adagiorum Collectanae 1506、パリ、ジョス・バード書店、初版に収録、以降の版で増補）、『痴愚神礼讃』Moriae Encomium（1511、パリ、ジル・グールモン書店）、『キリスト教君主教育』Institutio Principis Christiani（1516、バーゼル、フローベン書店）などに見る戦争批判、平和勧告等、「平和」に関わる著作・文章は決して少なくはない。

他方、エラスムスは数多くの書簡を残しており、宛先にはトマス・モア Thomas More（1478-1535）や、ジャック・ルフェーヴル＝デタープル Jacquis Lefèvre d'Étaples（1450 頃-1537）、ギョーム・ビュデ Guillaume Budé（1468-1540）らの知識人のみならず、マルティン・ルター Martin Luther（1483-1546）、フィリップ・メランヒトン Philipp Melanchton（1497-1560）ら宗教改革者、教皇レオ 10 世 Leo Ⅹ（位 1513-1521）、クレメンス 7 世 Clemens Ⅶ（位 1523-1534）、枢機卿トマス・ウルジー　Thomas Wolsey（1475 頃 -1530）など高位聖職者、そして王・君主とその重臣たちという 16 世紀ヨーロッパ史の重要人物が名を連ねている。フランソワ 1 世 François Ⅰ er（位 1515-1547）は、エラスムスがそのように書簡を認めた君主のひとりである。いうまでもなく 16 世紀を代表する君主であり、フランスに文芸を奨励しルネサンスをもたらすことに尽力し、また一方イタリア戦争においては長きに亘ってハプスブルクの神聖ローマ皇帝カール 5 世 Karl Ⅴ（位 1519-1556）との抗争を繰り広げたフランス王であった。

本論考は、そうした書簡の中からエラスムスによる 1517 年 2 月 21 日付フランソワ 1 世宛書簡を取り上げ、1494 年フランス王シャルル 8 世 Cherles Ⅷ（位 1483-1498）のナポリ

侵攻に始まるイタリア戦争を背景としたエラスムスの『平和の訴え』との関わりと、両者に見るエラスムスの「平和」に関する思想の共通点の抽出を試みるものである。

1. イタリア戦争と『平和の訴え』

1）イタリア戦争

イタリア戦争に関しては既に幾つかの稿において触れているのであるが、その概観を繰り返すことを許されたい。1494 年、フランス王シャルル 8 世がナポリ王国の継承権を盾にイタリアに侵攻する。この事件が、中世以来のコムーネを基盤とした小国が抗争を繰り返しつつもローディの和（1454 年）以来 5 列強による微妙な力のバランスの上に辛くも安定を保っていたイタリアを戦火に陥れた。この戦争に直面してフィレンツェ共和国、ミラノ公国、ヴェネツィア共和国、ナポリ王国、教皇庁といった列強をはじめイタリア各国は各々の思惑に従って同盟とその破棄を繰り返すことになるのであるが、ここに関与したのはイタリアだけではなかった。ナポリを占領したフランスに対抗し、教皇、皇帝マクシミリアン 1 世 Maximilian Ⅰ（位 1493-1519）、ヴェネツィア、ミラノ、スペインが対仏同盟を結ぶ。ナポリ自体シャルル 8 世の侵攻以前はスペインのアラゴン家の支配下にあったため、この暴挙に対してスペイン（アラゴン家）のフェルナンド 2 世 Fernando Ⅱ de Aragon（位 1479-1516）は直ちに派兵しフランス軍を駆逐した。

こうして始まったイタリア戦争は、むしろ外国勢力の介入がその性格を決定づけている。戦争の発端となったナポリ王国は、長きに亘ってフランス・アンジュー家の支配下にあったが、1435 年に始まる継承戦争でスペイン・アラゴン家のアルフォンソ 5 世 Alfonso Ⅴ de Aragon（位 1416-1458）が勝利して以降アラゴン家の影響下に入る。アルフォンソの死後はその弟と後継者によって統治されてゆくが、そうした中、アンジュー家の継承権を理由に侵攻を行ったのがシャルル 8 世であった。このような歴史的経緯からも、この戦争の当初からフランスのみならずその対抗軸としてのスペインはイタリアの政情にとって重要な意味を有していたのである。

その後、イングランドやスイスの参戦もさることながら、とりわけ皇帝マクシミリアン 1 世、カール 5 世―彼はスペインをも継承する―のハプスブルク家と、シャルル 8 世からルイ 12 世 Louis Ⅻ（位 1498-1515）フランソワ 1 世に至るフランス王家との間の角逐が、その対立の両極を成してゆく。西ローマ帝国の崩壊以降もコムーネとしての自治を保持し中世をとおして発展を続けたイタリア各国に対し、他方ではローマからは辺境の地、プローウィンキアであったアルプス以北のいくつかの国は次第に王権を中心とした中央集権国家としての骨格と国力を整えつつあった。先述のフランスの他、ばら戦争という内乱を経てチューダー家の支配を確立したイングランドもやがてこのイタリアを巡る戦争に介入してゆく。イタリア諸国はこれらの新興国の狭間で変転する情勢に虎視眈々とし、間歇的な戦役を繰り返しながら 1559 年カトー＝カンブレの和を以ってようやく戦争は終結する。

2）『平和の訴え』

エラスムスの『平和の訴え』は、まさにこのイタリア戦争の最中、おそらく 1516 年に執筆され 1517 年フローベン書店から出版されている。その後 12 年間に 20 以上の版を重ね[1] 同世紀のうちにフランス語、ドイツ語、スペイン語、英語など各国語に翻訳された、彼の平和論の象徴とも言える著作である。

作品は古典古代由来のデクラマティオ decramatio（模擬弁論、練習弁論）の様式により、擬人化された「平和（の女神）」Pax が我が身の不幸、即ち人間界の戦争を嘆き平和の実現を訴えるというものである。彼女の「訴え」は、他の動物・自然界から宇宙までが和合と調和の内に存在しているにも拘わらず、唯一人間のみがその自然本性に反して戦争に狂奔していることに対する嘆き始まり、聖職者、学者、君主など社会的指導層の諍いと戦争への関与・扇動に対する鋭い批判、また古典古代の著作や歴史、聖書に見られるキリスト教の教えを根拠とした戦争への非難と平和の奨励を展開してゆく。そうした中でとりわけ特徴的なことは、君主に向けた戦争忌避と平和実現の勧告である。彼は特に君主の務めとして公共の福祉、国民の幸福、その礎たる平和の維持を説き、さらに継承問題・条約締結問題など具体的な平和実現・維持の手段の提言に文章を割いている。そして最後に実在の君主達の名を挙げ平和への尽力を訴えてこの作品は締め括られる。

以上からこの作品が平和に関する抽象的・概念的考察というより、むしろ戦争と平和に関わる現実的な社会批判・提言が主軸を成していることが理解されよう。それを明確に示しているのが、冒頭を飾るユトレヒト司教フィリップ・ドゥ・ブルゴーニュ Philippe de Bourgogne（1464-1524）への献辞[2] である。フィリップ・ドゥ・ブルゴーニュはブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン Philippe le Bon（1396-1467）の庶子であり、司教就任以前から公国の要職を担った人物であった。エラスムスは彼とその一族の善政を称賛しつつ、当時の戦争の危機と平和維持への希求を訴えてこの書物を捧げている。ここでは戦争の不安やフランスとの和平など当時の緊迫を想起させる文章によって、この著作が喫緊の情勢に対応して書かれたものであることが明示されている。それが如何なるものであったのか、『平和の訴え』が書かれた背景について見てゆこう。

3）作品成立の背景

この作品が執筆された 16 世紀初頭、エラスムスは既に全ヨーロッパ的名声を確立し、

各国の貴顕からの招聘が絶えることが無かったが、彼自身はいかなる国家・君主にも属さず独立を保つ姿勢を貫いた。しかしながら唯一の例外と言えるのが、1516 年ブルゴーニュ公シャルル Charles de Bourgogne（1500-1558）の名誉顧問への就任である。当時二十歳にも満たないこの君主は皇帝マクシミリアン 1 世を祖父に持つハプスブルク家の一員であり、後にスペイン王カルロス 1 世 Carlos Ⅰ、さらに神聖ローマ皇帝カール 5 世としてハプスブルクの繁栄の基礎を築くことになる人物である。エラスムスをその名誉顧問に推したのはブルゴーニュ宮廷の重臣ジャン・ル・ソヴァージュ Jean le Sauvage（-1518）と

シエーヴル侯ギョーム・ドゥ・クロワ Guillaume de Croy（de Chièvre）（1458－1521）であったが[3]、彼にこの著作の執筆を依頼したのは、このル・ソヴァージュであった。

エラスムス自身、1523 年 1 月 30 日付のヨハン・フォン・ボツハイム John von Botzheim（1480 頃 －1535）[4] 宛書簡において『平和の訴え』成立の背景を次の様に述べている。

「私（エラスムス）が初めてブルゴーニュ公の宮廷に招かれ、『平和の訴え』を執筆してから、ほぼ 7 年になる。人々は平和条約を鋼の如く確固としたものとするため世の最も偉大な君主たち、即ち神聖ローマ皇帝、フランス王、イングランド王、ブルゴーニュ公シャルルによるカンブレー条約締結のために力を尽くしており、この計画はギヨーム・ドゥ・シエーヴルとジャン・ル・ソヴァージュによって主導されていた。彼らは平安を持続することに何の利点も認めない人々と対立していた。このようにして、ジャン・ル・ソヴァージュの懇願によって私は『平和の訴え』を執筆したのであった。…[5]」

この書簡に彼自身が述べているように、『平和の訴え』と 16 世紀初めのヨーロッパの政治情勢とは明瞭に直接的な関わりを有しているのである。

エラスムスがシャルルの名誉顧問に任じられたのは 1516 年の 1 月頃とされているが、同年 1 月 23 日シャルルの母方の祖父スペイン王フェルナンド 5 世 Fernando Ⅴ ,Fernando Ⅱ de Aragon（1452－1516、1474 －カスティリャ王、1479 －アラゴン王）が死去、シャルルはスペイン王カルロス 1 世として即位する。イタリアを巡る両国の確執は既に見たとおりであるが、同時期ブルゴーニュ宮廷の二人の重臣はフランスとの間で和平条約を締結することに力を尽くしており、彼らの努力は 8 月 13 日にフランス＝フランソワ 1 世とスペイン＝新王カルロス 1 世を主軸とする「ノワイヨン条約」として実を結ぶこととなる。フランスとの和平を推進する彼らはこの条約をさらに確実なものとするために、反対勢力とのせめぎあいの中で折衝を重ねてゆくが、その結果が先のボツハイム宛書簡に見られる 1517 年 3 月 11 日の「カンブレー条約」であった。『平和の訴え』はこうした歴史の一連の流れの中で、カンブレー条約締結実現に専心するブルゴーニュ宮廷の重臣たちによって、若きブルゴーニュ公＝スペイン王とヨーロッパ全域に対する高名な人文主義者エラスムスの影響力を期待して依頼された作品であったと言えよう[6]。

2. 1517 年 2 月 21 日付フランソワ 1 世宛書簡

1）エラスムスとフランソワ 1 世

さて、最初に触れたとおりエラスムスはその生涯に極めて多くの書簡を残しており、P.S. アレンによるエラスムス書簡集に収められている手紙は、返信や関連の書簡を含め 3000 以上に上る（*Opus Epistolarum Des.Erasmi Roterodami, denuo recognitun et austum per P.S.et H.Allen*, 12 vol.,Oxford University Press, 1906－1965）。なかでもその宛先に多くの君主や高位聖職者達の名を見出すことができることは、当時のヨーロッパにおける彼の名声と影響力の大きさを物語って余りあるものである。そうした中でフランス国王フランソワ 1

世に関わる書簡も少なくはない。ひとつの特徴的なものとしては、フランスを代表する人文主義者かつ王の秘書官でもあったギヨーム・ビュデによるエラスムス招聘に関わるものである。対外戦争のみならず文化政策にも大きな関心を払っていた王は、レオナルド・ダ・ヴィンチ Leonardo da Vinci（1452–1519）招聘にも象徴されるようにフランスにルネサンスをもたらした数々の試みによっても知られている。学芸奨励のため王立教授団 collège royal d'emseignement supérieur 設立を企図するフランソワは、無論ビュデの助言もありその準備のためにエラスムスをフランスに招聘することを熱心に望んでおり、ビュデもまたエラスムス・国王両者に対してその仲介の労を惜しまず書簡のやり取りをおこなって王に対してもエラスムスに対しても互いを強く推薦している。さらに驚くべきことに 1523 年 7 月 23 日には王自らの筆によってエラスムス宛の招聘の書簡さえ綴られている [7]。

しかしながらエラスムスとフランソワ 1 世の直接の邂逅は、ブルゴーニュ公シャルル＝カール 5 世やイングランド王ヘンリー 8 世と同様ではない。言うまでもなくシャルルとはその名誉顧問としての役割故に、著作の献呈 [8] や各地への随行など記録に残る以外にも多くの場面で言葉を交わす機会もあったであろう。またヘンリー 8 世とは 1499 年の渡英の折、トマス・モアらイングランドを代表する人文主義者らとともに未だ若き王子であった彼と親しく出会う機会を得ている。しかしことフランソワ 1 世に関しては、ビュデの手紙に見出だせるような輝かしい賛辞と厚遇を提示するフランス王の招聘に対して、常にエラスムスは政情不安や自らの健康を理由に謝絶を続けた。

そうした状況の中、エラスムスは 1517 年 2 月 21 日付でフランソワ 1 世宛の一通の書簡を認めている。

2）1517 年 2 月 21 日付フランソワ 1 世宛書簡概要

先にも述べたようにエラスムスによる君主貴顕への書簡は珍しいものではなく、フランソワ 1 世宛書簡も複数残されている。しかしながらこの書簡が関心を引くのは、1517 年と言えば先述の如き歴史的状況においてエラスムスが『平和の訴え』を執筆し、それがフローベン書店より世に出された年であるという点である。そこで先ずはこの 1517 年 2 月 21 日付書簡の概要から始めてゆきたい。なおこの書簡に関しては、P.S. アレンによる *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami, denuo recogunitun et austum per P.S. et H. Allen*, tom.Ⅱ, Oxford University Press, 1910, pp.476–477.［書簡番号 533］及びその仏訳 *La Correspendance d'Érasme* vol.Ⅱ, Presses Académiques Européennes, pp.607–608. から訳出している。

この書簡は「いともキリスト教的フランス王フランソワにロッテルダムのエラスムスが挨拶を送る」CRISTIANISSIMO GALLIARVM REGI FRANCISCO ERASMVS ROTERODAMVS SALVTEM D. という宛書に始まるが、ここに見る「いともキリスト教的」という呼称は歴史的にフランス王固有の称号である。エラスムスはこの呼称を彼の意図に対応させて直ちに繰り返している。

「衆目の一致する如く最も隆盛を誇り卓越せるフランス王国は、その慈悲と軍事的栄

光によって数多の傑出した王達を輩出しているが、最も偉大で最良の王は、より多くの輝きを以てこの高貴な呼称〈いともキリスト教的王〉というフランス王に固有の称号を担っていると私には思われるフランソワ、あなたである。」

そしてエラスムスはその理由を続ける。

「実際君主のなかの君主、王のなかの王であるキリストが彼自身その弟子を識別するための唯一の印、唯一の象徴が相互の和合であることを欲した如く、あなたは一たびスイスに対する戦争が終結するや、戦争をするためにあなたに欠けているものが決断力でもその準備でもないことを知りつつも、あなたのすべての力を戦争の動揺を決定的に鎮めることに費やすことと今後の永久平和のためにキリスト教国の主要な君主達を集めることに尽力することを選んだのであった。」

「あなたは、その豊かな慧眼で証明する。王達の間の不和がすべての良きものの喪失と破壊を導き出し、代わりにすべての悪の汚れた流れが死すべき人間の生活を浸すことを。斯て平和と真摯な友好は彼らの心とその財産をひとつに結び付け、慈悲と卓越した法、そして自由学芸に関して存在しているすべてのもの－これらは常なる朋友であって平和の養い親である－は黄金の時代の如く、ともに花開くのである。」

「あなたのまことに王たる精神は、最も多くの人々を支配するのではなしに、最も幸福で最良の人々を統治することによってあなたが最も豊かで最も傑出した君主となることを理解し認識している。」

このように文章は王に対する称賛に溢れておりそれは最後まで一貫している。しかしわけても彼がこの若き王を讃えるのはその戦争に対する対応であり、以下の様に統治における平和尊重とそれが国の安寧や学芸の振興をもたらすことへの彼の理解を強調するのである。

「従って、用心怠らざる陛下、この成果をより確固たるものとするために、陛下は既にその王国にすべての徳と学芸において比類なき人々をかくまで有するにも拘わらずさらに多くの賜物を授けながら彼らを招いているが、それは既に極めて豊かな王国をこの種の装飾によって一層に豊かにするためである。陛下は充分にご存知である。豪奢さや戦勝記念物やピラミッドの如き壮麗な建造物にも勝って、こうした美化がその帝国の姿の証左であるということを。」

続いてエラスムスは、すでに王による招聘があったことを推測させる件も差しはさみつつ、王への称賛の言葉を続けてゆく。

「あなたの厚情は、いとも過分な賜物を以てそうした中から私を招くことを良しとされたことであるが、私はあなたの気高く且つそれに勝るとも劣らず寛大な精神に、極めて恩義を負うていることを充分に存じ上げている。」

「願わくば、私がかくも偉大な君主の期待に沿える充分な知性と学識を有さんことを。そしてあなたの卓越せる徳と目覚ましい栄光への称賛、とりわけあなたの個人的尽力によってキリスト教界に平和の回復という神聖なる善行をもたらした栄光を、後世に

伝えるに充分な雄弁を私が有さんことを。」
「私は全能の神に祈る。神があなたの勇気にかくも寛大な衝動を与えたことが神意に適ったその後、それらが無事に成功に導かれんことを。」
「この平和をもたらす王が〈王達の心は神の手の中にある〉〈かれらがどのような方向に向かわされるかは、神の決定による〉と書いたことは、まことに正しい。」
「誰が疑うであろうか、このような意向があなたに示されたのは神の霊感であるということを。」
「それ故、この卓越せる幸福をキリスト教界に調和させた ―そしてそれはとりわけあなたの仲裁によってであった― 神が、この恩恵があなたたちの慈悲とあなたたちの揺るぎ無さによって能うる限り長く続くことを望むであろう。」
「すべてにおいて幸福で繁栄するあなたの王国或いはむしろ人々のために、私がすべてにおいて自らを委ねる陛下を神が永きに亘って護り維持せんことを。」

以上がこの書簡の内容であるが、基本的にはフランソワ 1 世への称賛の手紙である。美辞麗句に彩られた章句はこの時代の常として特異なものではないが、ここで注視すべきは彼がフランソワを称賛する根拠であろう。それは先ず第一に彼が「スイスに対する戦争」の終結に際して「すべての力を戦争の動揺を決定的に鎮めることに費やすことと今後の永久平和のためにキリスト教国の主要な君主達を集めることに尽力することを選んだ」ことに他ならない。そうした彼の行動と平和重視が、エラスムスの称賛の根幹にあるのである。

そしてこの「戦争」とは 1515 年 9 月のスイスとフランスによる「マリニャーノの戦い」を指す。王位に就いてほどないフランソワ 1 世自ら軍を率いての合戦であった。

3）マリニャーノの戦い

ルイ 12 世の死去に伴いフランソワ 1 世が王位に就いたのは 1515 年 1 月 1 日であったが、イタリア戦争に関して彼は先の二人の王の方向を踏襲し、ミラノ領有を意図するフランソワは早速自ら指揮を執りつつ軍を進めた。この戦いにおいてはミラノに兵を進めるフランスをヴェネツイアが援助し、ミラノ公と教皇レオ 10 世がこれに対抗したが、1515 年 9 月 13 日、14 日のマリニャーノ（ミラノ南東約 15 キロ）では教皇側に立つスイス軍とフランスによる戦いとなった[9]。

この戦いにおける華々しいフランス軍の勝利は特にフランスにおいては大いに喧伝されたようであるが、その結果イタリア戦争に関わるいくつかの情勢の塗り替えやエラスムスの書簡に見るような条約の締結が行われた。10 月 13 日、レオ 10 世とのヴィテルボ条約によってフランスは再びミラノ領有を承認され、翌 1516 年 10 月 29 日、フランスとスイス連邦はフリブール（スイス）において永久平和条約を締結した。このフランスとスイスの関係は現代に至るまで保持されており、またスイスに関して言えば、この戦いを契機に

スイス連邦はイタリア戦争から撤退しただ傭兵としてのスイス人がこの戦いに関与するのみとなる。これが先の書簡でエラスムスが言及している「スイスに対する戦争」であり、対スイスに限ってではあるが、確かにフランソワは「永久平和」のための条約締結に成功したのであった。また 1515 年 12 月 11 日から 14 日にかけてフランソワはレオ 10 世と会談し、その後のフランス宗教政策の基軸となるボローニャ政教条約を結んでいる。

こうした史実としてのマリニャーノの戦いとその後の条約締結を確認すると、彼が書簡に記した言葉の意味とその現実性が確認できよう。フランソワの学芸保護への関心もここで伺い知ることができるひとつの要素であるが、王の招聘に鄭重な謝辞を述べる章句においてさえエラスムスはフランソワが達成した平和の回復への評価を怠らない。「願わくば、私がかくも偉大な君主の期待に沿える充分な知性と学識を有せんことを。そしてあなたの卓越せる徳、目覚ましい栄光への称賛、とりわけあなたの個人的尽力によってキリスト教界に平和の回復という神聖なる善行をもたらした栄光を、後世に伝えるに充分な雄弁を私が有せんことを。」という文章に見るように、書簡の半ばで平和な王国における幸福のひとつとしての学芸興隆への言及に始まり、それを引き継ぎ自らへの厚情を感謝しつつ平和の回復者としての彼に向けた賛辞を巧みに挿入している。

手紙を締めくくる部分における「それ故、この卓越せる幸福をキリスト教界に調和させた―そしてそれはとりわけあなたの仲裁によってであった―神が、この恩恵があなたたちの慈悲とあなたたちの揺るぎ無さによって能うる限り長く続くことを望むであろう。」は、マリニャーノの戦い後の条約締結におけるフランソワの尽力とその達成を神の嘉するところと断じ、「あなたたち」即ちイタリアの戦乱に関わる君主達の平和への努力を促す文章であると解釈することができる。この美辞麗句に彩られた書簡は、若きフランス王への平和実現への希求、平和の訴えなのである。

3.『平和の訴え』と 1517 年 2 月 21 日付フランソワ 1 世宛書簡

1)『平和の訴え』に見るフランス及びフランソワ 1 世

ここで再び『平和の訴え』に戻りたい。この著作がブルゴーニュ宮廷和平推進派の依頼によってカンブレー条約準備の一環として依頼された背景からも、そこに現れるフランスに関する記述における当時の政治情勢と、エラスムスの立場の如実な反映は理解に難くない。スペイン王位を継承したブルゴーニュ公シャルルとイタリアを巡っては対立関係にあるフランスを、誰にもまして和平を目指すエラスムスは擁護しないわけにはいかないのである。

『平和の訴え』中盤、突如としてフランスに関して割かれた一節が登場する[10]。戦争に明け暮れる人間の愚かさと狂気を非難し、戦争の主体たる君主や高位聖職者への批判、その君主のあるべき姿を提唱するエラスムス＝「平和（の女神）」は唐突とも言えるフランス賛美を繰り広げるのである。国土の広さ、国の繁栄、元老院とアカデミア、国家の権勢

と法律、宗教的権威、そのすべてにおいてフランスはヨーロッパの中で最も優れており、この国ほど人々の和を保っている国は無い、と最大級とも言える賛辞が展開される。さらにこの国こそ「キリスト教の無瑕の華でありその最も堅き砦」であるとしながらも、その繁栄が周辺国の戦争の動機となり戦争が始まれば多くの国の攻撃にさらされるであろうことを訴えるのである。先述の通りフランスとの和平の恒久化とさらに多くの君主との間の確固とした和平条約 ―即ち 1517 年 3 月 11 日に締結されることとなるカンブレー条約―を準備するル・ソヴァージュらによって執筆を依頼された平和主義者エラスムスである。その彼がブルゴーニュ＝スペイン君主シャルルをはじめこの戦いに関わる人々に対し、このように相手国フランス擁護のための一節を割くのはむしろ当然であろう。

そして彼はこの著作の末尾で後のカンブレー条約締結に関わることになろう君主達、教皇レオ 10 世、スペイン王カルロス 1 世、皇帝マクシミリアン 1 世、イングランド王ヘンリー 8 世を登場させ、彼らがこぞって平和の推進に賛同していると訴える [11]。そうした君主達の中に当然ながらフランソワ 1 世の名が挙げられているのであるが、彼に関わる記述は、ここでも少なからず特異である。エラスムスはこの王について先ずは「いともキリスト教的フランス王フランソワ」Christianissimus Gallicum rex Franciscus という先の書簡と同一の呼称から始め、彼を「いともキリスト教的フランス王という称号のみならず、平和を買うことを躊躇せず、いかなる状況下においても王権を重視せずに公衆の平和のためにのみ尽力し、これらによって人類のために力を尽くすことこそ王の光輝ある称号に価することを自ら示している」と表現している [12]。この節では上述の君主達がそれぞれの言葉によって修飾されるが、彼自身が名誉顧問を務めるカルロス 1 世についてさえ「清廉な天性の若者 [13]」とのみ記されていることに比較してもフランソワ 1 世に関わる修飾辞は長さにおいても具体性においても際立っている。

『平和の訴え』をフランスとフランソワ 1 世に焦点を絞って検証することで、彼がシャルルの名誉顧問に就任した周辺の数年間の情勢とこの著作との密接な結びつきが、「フランス」という要素を通して改めて確認できるのである。

2）共通項 ―フランス王に関わる記述

以上の様に、ほぼ同時期に記述された [14]『平和の訴え』とフランソワ 1 世宛書簡は、フランソワとシャルル（カルロス 1 世）の即位周辺の数年間の政情を反映するものである。そして両者における共通項としてフランス或いはフランス王に関する記述が確認できたが、ここではこの書簡と『平和の訴え』に見る共通点を考察してゆく。

先ずはフランス及びフランス王に対する称賛であるが、これに関する『平和の訴え』の記述は先の項で挙げた。これに対し今一度書簡の冒頭を取り上げたい。「いともキリスト教的フランス王フランソワにロッテルダムのエラスムスが挨拶を送る」「衆目の一致する如く最も隆盛を誇り卓越せるフランス王国は、その慈悲と軍事的栄光によって傑出した王達を数多輩出しているが、最も偉大で最良の王は、より多くの輝きを以てこの高貴な呼称

〈いともキリスト教的王〉というフランス王に固有の称号を担っていると私には思われるフランソワ、あなたである。」

「いともキリスト教的」が繰り返される点は、この称号が周知のとおりフランス王固有の呼称であるということも言うまでもないが、これはエラスムスの平和との関連におけるキリスト教観とも呼応する。『平和の訴え』において、平和維持と平和そのものの重要性は古典古代著作や古代史とともに、キリスト教及び『聖書』の記述を論拠として展開される。『平和の訴え』では戦争に参与しこれを扇動する聖職者が痛烈に批判されるが、それとは対照的に「キリスト教」そのものはエラスムスにとって徹頭徹尾平和の宗教である。『痴愚神礼讃』に見る聖職者批判や『校訂新約聖書』Novum Instrumentum（1516、バーゼル、フローベン書店）をはじめとする多くのキリスト教関連文書が示すように、エラスムスにとって「キリスト教」は「平和主義」と同様生涯を貫く主題であった。その彼が平和の象徴のみならずその指針としてキリスト教と神を論ずる記述には、『平和の訴え』でも少なからぬ枚数を費やしている。一例として、この書簡に見る「実際君主のなかの君主、王のなかの王であるキリストは、彼自身その弟子を識別するための唯一の印、唯一の象徴が相互の和合であることを欲した如く」という表現との符合は、『平和の訴え』の中でもキリストと弟子たちの間においても愛、和合が極めて重要であったことを論ずる節に見出すことができる。一例を挙げるとそれは「世俗の君主達はとりわけ戦争において従者達を識別する印（徽章）で彼らを見分けるが、キリストが弟子達を識別するのは相互の愛以外の何ものでもない」という表現として表れている[15]。

3）共通項 ―君主観

また『平和の訴え』においてはしばしば君主のあるべき姿が平和維持の観点から説かれるが、これもこの著作における重要な主題のひとつである。フランソワ宛書簡においては彼に対する称賛という形ではあるが、エラスムスの勧告する君主の統治とその務めが提示される。

「あなたのすべての力を戦争の動揺を決定的に鎮めることに費やすことと今後の永久平和のためにキリスト教国の主要な君主達を集めることに尽力することを選んだ」という文章によって示されているのは、マリニャーノの戦い終結に際してのフランソワの業績に対するエラスムスの高い評価であろう。しかしなお且つ、ここに記述される「戦争の動揺を鎮める」ことは『平和の訴え』において彼が強く主張する君主の務め、即ち君主による平和の維持・戦争回避の義務に明確に呼応していることに注目すべきである。或いは「あなたのまことに王たる精神は、最も多くの人々を支配するのではなしに、最も幸福で最良の人々を統治することによってあなたが最も豊かで最も傑出した君主となることを理解し認識している。」という件も『平和の訴え』において随所で繰り返される「君主のあるべき姿」「あるべき統治」をほぼ完全に踏襲している。その例としては既に冒頭のユトレヒト司教フィリップ・ドゥ・ブルゴーニュへの献辞に見る国家の安寧 salutaris reipublicae と国民

全体の平和 pax publica を重視した彼とその一族の統治への評価が充分な例証となろう[16]。

或いはまた『平和の訴え』でエラスムスは、君主が先ず第一に国民と公共の福祉のために統治すべきことを強調するが、こうした君主観については書簡においても明確である。「あなたのまことに王たる精神は、最も多くの人々を支配するのではなしに、最も幸福で最良の人々を統治することによってあなたが最も豊かで最も傑出した君主となることを理解し認識している。」という一文があるが、こうした主張は『平和の訴え』に頻出し、例として巻末に見る君主達への訴えに見出すことができる。「国民の幸福に向き合うことは君主自身に一層の光輝を与える彼にとっての幸福となり、幸福で有徳な国民を支配するならば、君主達は一層の威厳をもって統治するであろう。従って彼は武器よりも法によって統治するであろう[17]。」という文章との共通性は明白である。

『平和の訴え』とこのフランソワ 1 世宛書簡に共通する表現については、さらに詳細に検証することが可能であるが、本稿においてはいま一か所を確認するに止めたい。「あなたは、その豊かな慧眼で証明する。王達の間の不和がすべての良きものの喪失と破壊を導き出し、代わりにすべての悪の汚れた流れが死すべき人間の生活を浸すことを。斯て平和と真摯な友好は彼らの心とその財産をひとつに結び付け、慈悲と卓越した法、そして自由学芸に関して存在しているすべてのもの－これらは常なる朋友であって平和の養い親である－は黄金の時代の如く、ともに花開くのである。」は平和との関わりにおいて彼の勧告する君主像である。しかしそれと同時に、「王達の間の不和がすべての良きものの喪失と破壊を導き出し、その代わりにすべての悪の汚れた流れが死すべき人間の生活を浸す」という描写は「王達の間の不和」という言葉を「戦争」に替えれば『平和の訴え』のはじめの弁論で「平和の神」が戦争と平和の定義について長い弁舌をふるう箇所を想起させるであろう[18]「（平和は）天と地のすべての善きことの源泉、両親、後見人であり、それなくしては何事も開花せず安全もなく、清澄でも神聖でもなく、人間にとっての快い事も神への感謝も無く、また反対に戦争はすべての悪の源であり自然において花を枯らし実りを潰し、甘く香しいものを苦くさせ…」

以上の比較から、エラスムスが「平和」という問題に対して、明確な戦争と平和に関する見解－戦争とは如何なるものであり平和とは如何なるものであるのか―を示し、とりわけこうした戦争の　―そしてまた平和実現の―　主体者たる君主とその統治のあり方を極めて重要視していた事実を抽出することができたと言えよう。フランソワに宛てた美辞麗句に満ちた書簡と『平和の訴え』の奇妙にも見えるフランス賛美は、彼が直面した 16 世紀の情勢をまざまざと表出させ、同時にまたそれに対するエラスムスの積極的な関わりを示すものである。

エラスムスはフランソワ 1 世に対してその後も、特に 1523 年 12 月 1 日に『マルコ福音書釈義』Paraphrasis in evangelium Marci（1512、フローベン書店）献辞として書簡を記している。この時エラスムスを取り巻く状況は宗教改革とその激化もあいまって 1517 年とは著しく変化しており、彼は徐々に厳しい状況に置かれつつあった。しかしながらこの

1523 年の書簡においても、平和に関する彼の確固たる主張は不変である [19]。

結語

本稿ではイタリア戦争、なかんずく 1616 年ノワイヨン条約と 1517 年カンブレー条約の締結に深く関わる『平和の訴え』と、そのエラスムスがフランス王フランソワ 1 世に宛てた 1517 年 2 月 21 日付書簡を取り上げて、周辺の歴史的状況を視野にその共通項を確認した。そこにはエラスムスの平和思想と、殊にその中で平和と戦争の主体者たる君主のあるべき姿が大きな主題となっていることが明らかに示されている。二つの文書はいずれも近接する固有の歴史的背景のもとに成立しているが故に、これらの著作の理解においてこうした背景を度外視することは不可能であることを一層明白にしている。エラスムスの平和思想に関しては『戦争は体験しない者にこそ快し』Dulce Bellum Inexpertis やまさにカルロス 1 世＝ブルゴーニュ公シャルルに捧げられた『キリスト教君主教育』Institutio Principis Christiani があり、これらの比較によっても彼の平和思想の根幹を考察することができるし、実際そこには多くの共通した思想・表現が見出される。しかしこのフランソワ 1 世宛書簡はそうしたエラスムスの平和思想とその背景を、書簡という異なる類の文書によって確認することを可能にする極めて興味深い資料である。それとともに当時のヨーロッパにおいて今となっては信じがたいほどの影響力を持っていたエラスムスが、驚くほど積極的に平和維持・戦争回避のために活動していた事実を、この二つの文書の存在が証明しているのである。

注

1　J.-C.Margolin, *La complainte de la paix*, p.911.（Ed.,C.Blum,A.Godin, J.-C.Margolin, D.Ménager, *Érasme: Éloge de la Folie, Adages, Colloques: Réflexions sur l'art, l'éducation, la religion, Laguerre, la philosophie*, Robert Laffont, 1992.）

2　Erasmus, *Querela Pacis, Erasmi Opera Omunia*, IV－2, North-Holland Pubrishing Company-Amsterdam, 1977. pp.59－60.

3　J.-C.Margolin, ibid., pp.909－910.
あるいは、その成立に関しては『平和の訴え』邦訳（エラスムス　箕輪三郎訳『平和の訴え』岩波書店、1961 年）の解説（二宮敬）164－176 ページを参照。

4　ボローニャで法学博士を取得しイタリアの人文主義者とも交流のあったコンスタンツの教会参事会員。エラスムスは数日間彼の家に滞在している。

5　Ibid., p.909.
ここで引用されたエラスムスの書簡は以下を参照。
Opus Epistolarum Des.Erasmi Roterodami,denuo recognitum et auctum per P.S.et H.Allen,tom. I, Oxford University Press, 1906, pp.18－19.
La Collespendance d'érasme, vol.I, Presse Académiques Européene-UniversityPress, 1967, p.17.

6　P.Brachin., Réflexions sur le pacifisme d'É rasme, p.250.（Ed.J.-C.Margolin, *Colloquia Erasmiana Turonensia* vol.1, University of Tronto Press, 1972.）

7　*Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami, denuo recognitum et auctum per P.S.et H.Allen*, tom.V,

Oxford University Press, 1924, pp.306－307.［1375］
La Collespendance d'Érasme, vol.V, Presses Académiques Européenes-University Press, 1976, pp.392－393.

8　『キリスト教君主教育』*Institutio Principis Christiani*（1516, フローベン書店）は新スペイン王としてのシャルルに献呈されている。

9　マリニャーノの戦いに関しては以下の書籍を参照。
G.Campbell, *The Oxford Dictionary of the Renaissance*, Oxford University Press, 2003, pp.500－501.
J.R. ヘイル編 中森義宗編訳『イタリアルネサンス事典』東信堂、2003 年、463－464 ページ。
柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系 フランス史 2』山川出版社、1996 年、78－79 ページ。
二宮敬『エラスムス（人類の知的遺産 23)』講談社、1984 年、57－65 ページ。

10　Erasmus, *Querela Pacis, Erasmi Opera Omunia*, IV－2, North-Holland Pubrishing Company-Amsterdam, 1977, p.80.

11　Ibid., pp.98－99.

12　Ibid., p.98.

13　Ibid., pp.98－99.

14　『平和の訴え』の出版は 1517 年 12 月にフローベン書店から出版されているが、執筆時期は正確には不明。1523 年ボツハイム宛書簡から推定可能。

15　Ibid., p.72.

16　Ibid., pp.59－60.

17　Ibid., p.100.

18　Ibid., pp.61－62.
同書、16－17 ページ。
Epistolarum Des.Erasmi Roterodami, denuo recogunitun et austum per P.S.et H.Allen, tom., V, Oxford University Press, 1910.pp.446－458.

資料

［エラスムス書簡］
Epistolarum Des.Erasmi Roterodami, denuo recogunitun et austum per P.S.et H.Allen, tom. I－II, Oxford University Press, 1909., 1910.
Epistolarum Des.Erasmi Roterodami, denuo recogunitun et austum per P.S.et H.Allen, tom. V, Oxford University Press, 1910.
La Correspendance d'Érasme vol. I－II, Presses Académiques Européennes.
La Correspendance d'Érasme vol.V, Presses Académiques Européennes .
『平和の訴え』
Erasmus, *Querela Pacis, Erasmi Opera Omunia*, IV－2, North-Holland Pubrishing Company-Amsterdam, 1977.
Ed., C.Blum, A.Godin, J.-C.Margolin, D.Ménager, *Érasme: Éloge de la folie, Adages, colloques, réflexions sur l'art, l'éducation, la religion, la philosophie*, Robert Laffont, 1992.
エラスムス 箕輪三郎訳『平和の訴え』岩波書店、1961 年。

参考文献

Ed.J.-C.Margolin, *Colloquia Erasmiana Turonensia* vol.1, University of Tronto Press, 1972.
Ed.J.-C.Margolin, *Colloquia Erasmiana Turonensia* vol.2, University of Tronto Press, 1972.
G.Campbell, *The Oxford Dictionary of the Renaissance*, Oxford University Press, 2003.

Ed., A.Rabi, Jr., *Renaissance Humanism* vol.2, University of Pennsylvania Press, 1989.
二宮敬『エラスムス（人類の知的遺産 23）』講談社、1984 年
柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系 フランス史 2』山川出版社、1996 年
J.R. ヘイル編 中森義宗編訳『イタリアルネサンス事典』東信堂、2003 年
クリストファー・ダガン 河野肇訳『ケンブリッジ版世界各国史　イタリアの歴史』創土社、2005 年
ゲオルク・シュタットミュラー　矢田年隆解題・丹後杏一訳『ハプスブルク帝国史―中世から 1918 年まで』刀水書房、1989 年。